

## 原子力安全委員会記者ブリーフィング

日時：平成23年5月25日（水）18：51～19：19

場所：合同庁舎4号館6階643号室

参加者：班目委員長、久木田委員、水間課長

○水間課長 では、本日臨時会議を開催いたしましたので、その後の記者の皆様との対話の時間ということで、これからブリーフィングをさせていただきたいと思えます。

毎度のお願いでございますけれども、この場での皆様とのやりとりにつきましては、速記録をとらせていただきまして、原子力安全委員会のホームページで公表させていただきますので、ご質問の際にはマイクをお持ちいたします。ご所属とお名前をよろしくお願い申し上げます。それでは、ご質問どうぞ。

○ニコニコ動画七尾記者 ニコニコ動画の七尾と申します。よろしく申し上げます。

何点かございまして、まず1号機には格納容器に窒素は入れておりますが、2号機、3号機ではまだ処理が施されていないと報告されております。

そこで、水素爆発の可能性について教えていただきたいのと、また再臨界に対する防御を含め、全体の評価としまして、現在、制御されていると考えてよろしいのか、この2点について、まずご見解をお願いいたします。

○久木田原子力安全委員 窒素の注入ですけれども、これはいわば念のためという趣旨が強いもので、と申しますのは、2号機、3号機についても、炉心で連続的に蒸気が発生しているということから、圧力容器、格納容器の中に大量に水素がたまるということは、基本的には起こりにくいというふうに考えられます。

1号機についても、格納容器の圧力を下げるときに、格納容器の圧力が大気圧以下になると、外から酸素が入ってきて、水素が漏れる可能性があるということもあって、窒素注入をしたということですので、2号機、3号機については、そういう状況になったときには、念のために窒素を入れた方がよいだろうということになると思えます。

それから、再臨界については、月曜日にもお話ししたところで、可能性は極めて限りなくゼロに近いということです。

○ニコニコ動画七尾記者 委員長、いかがでしょうか。今、あと全体的に水素爆発の可能性と全体的に制御されていると考えてよろしいのかどうか。

○班目原子力安全委員長 全体的に言えば、制御されているというふうに思います。ただ、ご注意いただきたいのは、やはり通常の原子力発電所の状態に比べて、非常に不安定なものである。例えば外部事象ですね。地震だとか津波だとか、いろいろなことを考えると、不安

定な状態であるということは、普通の場合に比べて明らかであるということだけは、ご承知おきいただきたいと思います。

○ニコニコ動画七尾記者 全体的な話になりますが、東京電力がようやく2号機、3号機のメルトダウンを認めました。他方では、保安院はまだ解析中であります。そして、保安院はレベル7の評価も遅れています。

事故から2か月経っていて、国民視点に立ってみれば、今さら何だという気持ちがあるわけです。そして、その矛先が原子力安全委員会にも向いてきているという、そういう見方もあるわけです。これは報道等でですが、どうしてこのようなことが起こるのか、ちょっと率直なお気持ちをお聞かせください。そして、保安院の評価に対するスピード感なんですけれども、これに対してはいかがでしょうか。

○班目原子力安全委員長 原子力安全委員会の立場は、やはり助言機関だと認識しております。それで、原子力安全委員会が原子力安全・保安院と全く違う見解というのをどんどん出すということは、やはり国民を混乱させるというふうに認識しております。そういうことから、我々としては、できる限りの助言を行ってきたつもりでございますけれども、なかなか原子力安全・保安院の方での作業が進まなかったということだと思っております。

例えば、ちなみにメルトダウンのことにつきましても、例えば3月28日だったと思いますが、既に燃料は溶けているというふうに言っているところですし、そのときの後の記者会見の場か何かでも、記者会見じゃなくて、多分、会議の中でも、1号も2号も3号も、いろいろなことを考えると、同様の状態であるという発言が多分、残っていると思います。

安全委員会としては、一応そういうような見解を述べさせていただいて、原子力安全・保安院の方に助言してきたつもりですけれども、なかなか作業が進まなかったということは、やや残念かなというふうには思います。

○ニコニコ動画七尾記者 海水注入が55分間中断されたとする問題がいまだに尾を引いているわけで、これは例なんですけれども、結局、IAEAの調査員も来日しまして、事故検証委員会も発足しまして、これから本格検証が行われる中で、これまで伝えられてきた事実関係が大きく覆されるようなことはあるとお考えでしょうか。

○班目原子力安全委員長 事実関係というのは、これまで東京電力の方から膨大なデータが発表されていますけれども、私も全部目を通す時間はとてもないんですけれども、ああいうものは、なかなかそう改ざんなんかできるものはないから、事実は淡々と出てきていると思います。ただ、今日もちょっと申し上げたんですけれども、結構、手動で操作したようなことについては、記憶違いとか、何とかというのものもあるかもしれませんので、その辺については、若干の修正はあるのかなというふうな気がしております。

○久木田原子力安全委員 ちょっとつけ加えますけれども、手動操作についてはもちろんで

すけれども、こういった事故、長期にわたって電源が落ちたような事故の場合には、例えばバルブ類のポジションがどうなっているか、弁が開いているか、閉まっているか、どれぐらい開いているかといったことについても、分かっていない情報はかなりあります。

それによって、どの配管がどういうふうに、どこにつながっているか、ということについては、依然としてよく分かっていないところがある。例えば、今、継続している注水についても、ある配管から入れるとなかなか冷えがよくないので、別の配管に切り替える、とかという現場の状況については、まだいろいろな障害があって、分かっていないところがありますから、そういう意味でシナリオが変わる、ストーリーが変わるということがあり得るというふうに思っております。

○ニコニコ動画七尾記者 わかりました。

これから梅雨、会議の中でもちょっと出ておりましたけれども、梅雨とか海水浴シーズンが始まるわけで、これに対して、かなり国民が心配しております。原子力安全委員会としまして、国民に対してメッセージがあれば、ちょっとこれにつきまして、ご指導いただければと思いますが、個人的にでも結構でございます。

○班目原子力安全委員長 この辺りに関しましては、事業者である東京電力も多分、必死で対応しているし、原子力安全・保安院においても必死の対応をしているんだろうと思います。我々としては、是非、しっかりとした対応をとっていただきたい。

こういうことに関しては、過度な心配をしてもいけないと思うけれども、しかしまた逆に楽観視してもいけない。その辺りはぜひ正しい理解をしていただけたらよろしいんじゃないかと、それだけでございます。

○ニコニコ動画七尾記者 これについては、昨日、原子力委員会で河田氏が土壤汚染につきまして、推計値をご報告されましたが、これについてはいかがでしょうか。

○久木田原子力安全委員 河田さんの資料、同じものかどうかわかりませんが、目にしています。いろいろな方がいわゆる土壤汚染の広がりについて評価をしておられる。そういうものが、文科省の方で体系的にやっておられるモニタリングも含めて、これからのいろいろな判断の基盤になっていくのだろう、ということしか現在のところは申し上げられないと思います。

○TBS 渡辺記者 TBSの渡辺です。

先週の19日の会見で、線量の把握をきちんと把握をする上で、伊達市の話なんですけれども、モニタリングのやり方など、文科省に対して何らかの方法を示すことも検討されると、何らか考えたいというふうにおっしゃっていましたがけれども、その後、具体的な動きというのは何かありましたでしょうか。

○班目原子力安全委員長 すみません。伊達市ということではなくて、もうちょっと全体的にモニタリングの仕方については、対策本部の方にいろいろな助言をしたいと考えているところです。結局、どういうことかということ、どこも同じように舗装道路からちょっと入ったところの土壌だけを採るとかということでは、明らかに無理がありますし、これからどんどんホットスポットといいますか、特に線量の高いところというのがどんどん出てくるんだろうと思います。

例えば、側溝の泥か何かをさらってどこかに積み上げたり何かすると、これは恐らく非常に高いかもしれないとか、そういうかなり細かいところに気を遣った配慮というのが今後必要になってくるということで、少しその辺あたりをしっかりとめた助言を近々しようと思っております。その中には、できたら伊達市の話なんかも入れたいなと思っております。

○毎日新聞比嘉記者 毎日新聞の比嘉と申します。

班目委員長にお伺いしたいんですけども、問題になっている55分問題の海水注入の件なんですけれども、今日の国会でもございましたが、再臨界の可能性はゼロではないと言ったところは事実上ゼロだと、その辺の解釈が難しいような表現について、助言をする立場として、その助言の方法が適切だったかどうか、ということはどうのように考えますか。

○班目原子力安全委員長 すみません、私はまず第一に学者と私自身言えるかどうかわかりませんが、常として全否定はしない。可能性が全くない、ゼロ%であるというとき以外は、ゼロではないという表現はよく使っております。そういう意味では、少しコミュニケーションのまずさは自覚するところなんですけれども、ただそのときに周りの方が大変驚かれたというような印象は全然持っておりません。そういう意味では、もしそうであるならば、是非、私に質問していただきたかったなというふうに思っておるところです。

○久木田原子力安全委員 その件、私もちょっと考えていましたけれども、どうしても我々は厳密にやりたいということで、ゼロではない、というふうな言い方をしてしまうというところがある。それから、そういうことを呑み込んで、ゼロです、という言い方をすることも、ひとつの判断であろうと思いますけれども、こういった事故の際には、官邸も含めて、いろいろな方から情報が提供され、いろいろな助言が来たりする。そういったときのことを考えると、必ずしも例えば再臨界について、ゼロですと言い切ってしまうことがよいのか、というようなこともありますね。かえってそういうことを言うことで、別の情報が入ったときに混乱してしまうということもある。ですから、なかなかそういうことについて、どういうふうに表現するかというのは難しいところである、というふうに私は思います。

○毎日新聞比嘉記者 もう一度確認なんですけれども、委員長にお伺いしたいんですが、助言をした後は、官邸としては、官邸の方が混乱しているような様子というのは見られなかった、ということではよろしいのでしょうか。

○班目原子力安全委員長 少なくとも私は何かそういうことで、大きな動きがあったというふうには記憶していません。

○テレビ朝日村田記者 テレビ朝日の村田です。

先ほど行われた衆議院の科学技術イノベーション推進委員会の班目先生の答弁についてお尋ねしたいんです。質問で3月11日から16日の間に保安院、文部科学省、安全委員会でそれぞれSPEEDIを何回動かしましたか、という質問があったときに、先生は事務方の方で7回というふうに言われていましたけれども、あれは一体何を指すのでしょうか。

○班目原子力安全委員長 すみません。事実関係はちゃんとその後確認しました。

あのとき申し上げましたけれども、依頼したのは3月12日の1回だけだそうです。ただし、その出力が7枚あるんだそうです。そのうち3枚か4枚は単なる風向きを示すだけで、それ以外は単位放出での予測のようなものでございます。

それで、これも確かではないので、申し上げた方がいいのかどうかわかりませんが、東北電力の女川の方か何かで線量が上がったとかというのを確かめたかったんじゃないかなという気もしますが、何かそういうのを1回だけやっている、それで7枚の出力を出しているというのがどうも事実関係だそうです。

○久木田原子力安全委員 すみません。その件で私は月曜日の定例会の後のこのブリーフィングで言ったことをちょっと修正したいと思います、そのときに3月12日の段階では原子力安全委員会として独自の計算をしていないというふうに確かお答えしていると思えますけれども、多分、私が見たリストが古くて、今、委員長が申しましたように、3月12日の19時だと思えますけれども、それが安全委員会として最初にやった計算ということになります。

○テレビ朝日村田記者 つまりそれは福島第一原発ではなくて、女川についての。

○水間課長 事務局から、これは既にホームページで公表されております。3月12日の19時という計算でございまして、ホームページ上は(1)、(2)、(3)といろいろありますけれども、(2)の一番最後のその他ということで、趣旨は、1号機からの放射性物質の放出を仮定した試算を行いました、というところをクリックしていただくと、7枚の絵柄が出てきます。こういう最初の4枚が、風向き、それから後ろの3枚で、放出源が全インヴェントリーと申しますか、全核物質が漏れたという前提で、1号炉から北の方向へ飛んでくという絵柄が3枚。この依頼と申しますか、試算の前提が1種類でございまして、これについて7枚の絵柄が出ているということでございます。これが3月12日ということで、今、申し上げた、あるいは国会での答弁は、このことを言っているということでございます。

○テレビ朝日村田記者 それで、その質疑では保安院が作成したSPEEDIの計算結果を官邸にファクスで送ったのか、電子メールで送ったのかが質疑の主なやりとりだったと思

ますけれども、この今、課長が示していただいた計算結果も官邸には送っていないわけですね。

○班目原子力安全委員長 もちろん送っていないと思います。

○時事通信松田記者 時事通信、松田と申します。

先ほどのホットスポットの件なのですが、非常に重要なことだと思うんですが、前向きに対応する方の話と、あと難しい面と2つあると思うんですけれども、前向きの方は要するにいわゆる色分け表示とか、要するに標識ですね。周りの人がぱっと見て、ああ、あそこはやばいんだというようなものが、要するに共通してひと目で分かるような、要するに道路標識に似たような感じの標識みたいなのを用意するような動きがあるのかどうかということと、あとは難しい面で言うと、線量は当然変化していくものがあると思うんですね。

それを結局、あるときにレベル判定したものを見直ししていく必要があると思うんですよ。場所によって、要するにいわゆるメッシュ的なものの単位をどういうふうに分けて、どういうふうにしてウォッチングして、だれがそれをメンテナンス、維持していくのかという問題と、あとはその情報をネットみたいな、要するにオープンにだれでも見られるような方が確かに便利ではあるんですが、一方で風評被害的なものが考えられるわけですね。

地元の人とか、そこに用があって出入りする人には、当然、周知しなきゃいけないんだけど、こう言うとなんか何ですけれども、余り関係のない人は余り知らなくていいんじゃないかみたいな面もあって、そこら辺の考え方というのをどういうふうに、今後、助言されていくつもりでしょう。

○班目原子力安全委員長 具体的な対応は、これは行政庁なり、地方自治体の方で考えていただくざるを得ないんです。たびたび申し上げてはいますが、安全委員会というところは小さな組織で、具体的な対応策まではとても手が回りかねます。是非、そういうところに事細かく注意が必要な段階になってますよ、という基本的な助言を差し上げることによって、行政庁や地方自治体の方でしかるべき、今ご提案のような対応もとっていただきたいなと思っているところです。

○共同通信菊池記者 共同通信の菊池です。

班目先生にお伺いします。

先ほど作業員の方の250mSvの件で、久住先生の方からできれば生涯線量等の関係について、放射線審議会や厚労省で整理する必要があるのではというようなご発言がありまして、それについて班目先生も同意されておりましたが、作業員の方についての250mSvもそうだと思うんですけれども、やはり子供の20mSv、今回、20mSvを許容しているわけではないということなんですけれども、20mSvというのがひとり歩きしてしまっていて、一昨日、文科省の方に福島親御さんが来たとかという話もあるんですけれども、今後、子供の放射線の緊急時の許容量について、文科省の審議会とか厚労省で、ある程度議論を詰めていく必要というのがある

のではないかというふうにも思うんですけども、先生のお考えをお聞かせください。

○班目原子力安全委員長 緊急時の被ばく線量、ICRPの方では、20mSvから100mSvというふうな参考値を示していますけれども、そのこともありますけれども、それ以上に我が国のある意味では法体系においては、現存被ばくの1 mSvから20mSvの中で、パーイヤーの中でALARAの原則に従って、なるべく1 mSv/yに近づける努力をすることというの、位置づけもされてないわけですね。

こういう話というのは、やはり本来は、文部科学省の審議会であるところの放射線審議会であるとか、あるいは厚生労働省であるとか、そういうところでちゃんとした議論が行われるべきでありますので、そちらの方でもちゃんとした議論をしていただきたい。

我々は、助言機関で、例えばICRPでどのようなパブリケーションが出ているかというのも存じ上げているし、IAEAなんかの文書も知っていますので、それをもとに、現在は原子力災害対策本部に対して助言をしているわけですけども、今後、ある程度この状態が続くわけですので、しっかりとした対応を求めたいなと思っているところです。

○フジテレビ青木記者 フジテレビの青木といいます。

地震被害について伺いたいんですが、今日の保安院の報告でも、東電は原子炉の重要機器については、地震による被害はないということで、保安院の評価もそれを是とするというような形でしたが、委員長自身はこの地震被害については、どういうふうに思われていますか。

○班目原子力安全委員長 私も実は東京電力のものを精査する時間が正直言って、国会対応等々で余りとれてなくて、あれなんですけれども、ざっと見た限りでは、安全上重要な機器に関しては、地震による被害はそれほど大きくはないのではないかと、もちろん外電喪失はあったわけで、こちらの方はもちろん大問題なんですけれども、外電喪失以外のことに関しては、安全上重要な機器が地震そのものによって被害を受けていることはないのではないかと、今のところは理解しております。

○フジテレビ青木記者 3号機の圧力低下などは、配管に損傷があったんじゃないかという話もあるようですが、これについてはどのように思われますか。

○班目原子力安全委員長 確かに私の理解では、HPCIといいますか、HPCIが起動している間だけ、ぼんと確かあれは圧力容器の中の圧力が下がっているんですね。それを例えば、HPCI系のどこかの配管に漏れがあったということで本当に説明がつくのかは、私はちょっとどうかなという感じがします。

というのは、確かにHPCI系の、HPCIというのは多分ご存じだと思いますけれども、炉からの蒸気でタービンを回して注水する系統で、その元弁が閉じれば漏れは止まるということで、ある程度説明がつくのかもかもしれませんけれども、それだけ急激な圧力変化というのが、それだけで本当に説明がつくのか。こういうのは、もうちょっとちゃんと解析をした上で、

結論をすべきものだというふうに思っております。

○フジテレビ青木記者 配管の耐震設計については、健全性は福島を含めて、他の原発も保たれているというふうにお考えなんですか。

○班目原子力安全委員長 この辺りはどちらかという、今回のご報告によるよりは、地震動の大きさということからの類推ということになってしまいます。

確かに、ある周波数なんかに関しては、3割ぐらいオーバーをしているところがあったかと思えますけれども、それぐらいであるならば、恐らくそれほど大きな損傷はなかったのではないかということです。残念ながら、福島第一発電所に関しては、その後、水素爆発等の被害が非常に大きいので、この辺りについてどうであったかというのを、これからきちんとした結論を出すというのは、非常に困難な作業だろうというふうに思っています。

以 上